



ぼうき草の産地であることを生かし、品質の良いぼうきを作って流通させる取り組みが続いている

そこで日本は、2007年から円借款を通じて植林事業を開始。単に木を植えるだけでなく、住民が森林の経済的価値を認識し保全につなげるべく、森林管理組織の設立、森林資源を活用した地場産業の振興、マイクロファイナンスの普及などに取り組んだ。

「国際協力に携わって20年以上。その中でもこの取り組みは障害が多かった」。植林事業の立ち上げを担い、約20人の専門家チームのリーダーを務めた辻さんは、当初の苦労をこう振り返る。

住民と森林官の努力で生まれたビジネスチャンス

その努力の結果、養豚や養鶏、魚の養殖、森の植物や竹を使った特産品作りなどのビジネス展開は、現在456村の3万8000世帯以上にまで広がった。「現金収入が増えて、家を建て替えた」、「バイクを買って、何時間もかけて歩いてた隣町まで数十分で行けるようになった」と、みんなうれしそう。「何より仲間と一緒にものづくりに取り組む時間は楽しい」と、線香の芯となる竹串作りを始めた女性も生き生きと話す。

「商品を作っても流通させなければ意味がない」と、世界の商人、であるタフなインド人ビジネスマンと何度も交渉し、トリプラ特産として知られるぼうきなどの市場開拓にもつなげた。

辻さんらは、事業のカギとなる住民たちと直接接する森林官の能力向上や森林局の組織改革にも力を入れてきた。現場の意見が反映され、

「森林を守るためには、住民たちと深い関係を築き、彼らの生活を改善するのは必須だった。インド政府にとっても村人にとっても大きな変革となった事業に関わることで、感謝している」とラジュさんは話す。

情熱を持って住民の貧困削減に取り組んできた森林官らの経験が、インドの未来に光をともしている。



子どもをそばに座らせて、布を織る女性。トリプラ州では部族ごとに独特の織り方があるため、布を見ればどの部族かが分かるという

行き詰まる
自給自足の暮らし

インドの首都ニューデリーから東へ2400キロ以上。バングラデシュを挟んで東側に位置する北東7州のうち、トリプラ州は最も

面積が小さく、東南アジア系の先住民が多く暮らす地域だ。人口の約8割が山岳・丘陵地帯に住居を構え、森の恩恵を受けながら暮らしている。

経済成長が著しいインドだが、いまだ3人に1人は1日約65ルピー（約120円）での生活。農業を中心に自給自足の生活を続けてきたトリプラ州でも、森林資源の過剰採取や焼畑農業で森林の荒廃が進み、これまでの生活を維持することが難しくなり始めていた。

今から7年前、日本工営株式会社の辻新一郎さんはトリプラ州を初めて訪れた。その時、森と共生して生きる「森の民」に強い関心を持ったという。「花や草木などの利用方法にも詳しい。彼らの知恵と技術こそが、森林保全と生活向上のカギとなるはずだ」。



森を守り、民を支える

インドの辺境の地として知られる北東部のトリプラ州。森林の恩恵を受けながら生きる「森の民」の生活向上を目指し、林業界のプロフェッショナルたちが奮闘している。



トリプラ州に広がる森。車が入れる場所は限られるため、その先の村へは徒歩で進む



住民集会では、どの質問にも的確に答える若い世代の姿が見られた。視察した榎本さんは「事務処理能力の高さに驚かされました」と話す